

全国同人雑誌最優秀賞 第15回 まほろば賞 発表

今年からまほろば賞は全国同人雑誌協会と文芸思潮が主催することになりました。よろしくお願ひします。

第一五回新全国同人雑誌最優秀賞「まほろば賞」選考会は、二〇二一年七月二五日に東京都大田区民プラザ会議室において、三田誠広氏、中上紀氏、小浜清志氏、五十嵐勉「文芸思潮」編集長の四名の選考委員によって慎重に審議が行なわれました。作品ごとに各選考委員が鋭利に批評し、熱い議論が交わされました。厳正な審査の結果、左記のように決定いたしましたので、ここに選評とともに発表させていただきます。

また全国からの読者の投票と寄付による読者賞の投票および内容の結果も併せてここに掲載させていただきます。今年から、「まほろば賞」は受賞作品には、賞状と賞金三十万円（賞金は主に寄付によるものです）および記念トロフィーを贈らせていただくことになりました。特別賞、三田誠広賞、河林満賞にもそれぞれ賞状と賞金十万円と記念品を、また読者賞には投票賞金と優秀賞賞金五万円およ

び記念品を贈らせていただきます。

今後とも全国の同人雑誌の中から優れた作品が生まれることを祈念し、たくさんの方の同人雑誌の作品が全国同人協会・文芸思潮に寄せられてくることを期待しております。

また、どうぞ作品の推薦にもいっそう多数の方が御参加くださるようお願いいたします。また積極的に読者賞への投票に加わっていただき、ぜひ皆様自らの熱い手でこの賞を盛り上げ、育てていただきたいと思います。全国の同人雑誌諸氏の御参加と御支持を切に願ひする次第です。

この授賞式は十月三十日土曜日東京神田「山の上ホテル」での全国同人雑誌協会総会・全国同人雑誌会議にて行われます。協会会員以外の方でも参加できますので、どうぞ御来席ください。

またこの結果及び選評とその動画、また優秀作品はインターネット「文芸思潮」ホームページでも発表される予定です。どうぞ御覧ください。

第15回全国同人雑誌最優秀賞

まほろば賞

「破れ蓮」
はちす

〔じゅん文学〕10号

飯田 芳

特別賞

「狐火」

〔仙台文学〕95・96号

渡辺光昭

三田誠広賞

「夢の岸」

〔中津川文芸〕復刊5号

鴨居 諒

河林満賞

「しずり雪」

〔飢餓祭〕46号

小網春美

読者賞

「負け犬」

〔ふくやま文学〕32号

瀬崎峰永

まほろば賞賞金は、故蘭藍子氏、三田村博史氏、来の宮あんず氏、故原石寛氏、夏日日美子氏、木内是壽氏、前岡光明氏、今田真理子氏、二宮英郷氏、堀井清氏、西島雅博氏、高橋惟文氏、勝又浩氏、越山しづか氏などの御寄付によるものです。ここに厚く御礼申し上げます。また「狐火」「安藝文学」「ぺん」「海」など文芸思潮同人誌団体会員の御協力にも厚く御礼申し上げます。



みた まさひろ
1948 大阪生まれ
早稲田大学文学部卒
77「僕って何」で芥川賞受賞
作品はほかに「いちご同盟」
「空海」「親鸞」など
最近の本「遠き春の日々」
日本文藝家協会副理事長
著作権情報センター理事
日本点字図書館理事
武蔵野大学名誉教授

評価が分かれた

三田誠広

候補作のレベルが高く評価が分かれたため選考は困難を極めた。最終的には順位をつけざるをえなかったが差は僅かだ。票が集まらなかった「負け犬」（瀬崎峰永）は暴行の被害者の少女が自殺に到る話だが、救急センターの報告書から始まって、医師を中心にした三人称の叙述、ソーシャルワーカーのカンファレンスメモと、多彩な文体の断片を重ねて、描かれている事実に客観的な視点をもたせよ

リアリズムで描かれる。蓮根を栽培する泥田の中での母殺殺しに到る展開は圧巻で、受賞に相応しい迫力がありテーマの重さがあった。ただこの主人公が蓮根を栽培するほかには労働意欲に乏しく、妻や子に対しても冷淡であることで、読者はシンパシーをもてないのではないかとという懸念が残る。とはいえこういう人物はどこにでもいるはずで、作品のリアリティーを削ぐものではなく、受賞に値する作品であることは認めないわけではない。

ここまで述べた三作はリアリズムで描かれているのに対し、「狐火」（渡辺光昭）はリアリズムの領域から一歩踏み出そうという意気込みに充ちた果敢な作品と感じられた。精神に障害を負った伯母のエピソードが中心に置かれている。主人公が生きている日常の世界から見ると、奇行を重ねる伯母の姿は日常性に危機をもたらし異物と感じられる。しかしながら作品の書き手はこの伯母の話始める前に、主人公の日常である朝のバス停で奇行を重ねる謎の男を描き、主人公が男のあとをつけていく過程を丹念に描く。そのことによって伯母の存在は異物ではなく、むしろ日常性を超えた不思議な領域とつながっていることが示される。さらに作品の最後にもこの謎の男が登場して、主人公と読者をリアリズムを超えた異様な世界にいざなっていく。この作品は「異様を描く」という文学の本来の在り方につながる重要な要素をはらんだ秀作だとぼくは考える。ここに

うという試みを評価したい。残念なのは被害者の告白の部分が長すぎて、作品が単調になり、せっかく試みた客観性が崩れてしまったことだ。少女の告白そのものにはそれなりの説得力があるのだが、そこに単純なフーザーコンプレックスという見解を提示する医師を登場させることで、かえって作品を底の浅いものにしていく。あるいは思いやりの深いソーシャルワーカーが登場するので、彼女の視点ですべてを描くのも一つの方法だったのではないかと思う。

次の「しずり雪」（小網春美）は商業文芸誌に多い絵空事のような恋愛とは一線を画した、老いた男と中年の女の奇妙で危うい関係を精密に描いた作品で、経営者と従業員という立場の違いや年齢差、さらに死に瀕した病人と介護者という関係を超越した、類例のない確固とした絆が男と女の間で芽生え深まっていくさまが、見事に描かれている。リアリズムに徹した筆致にも好感がもて、重い読後感をもたらす秀作であると思われた。例年のレベルであればこの作品がまほろば賞であつてもよかつたという気がしたが、昨今の同人誌の充実ぶりを見ると、来年はもっとレベルが上がりそうだという予感がする。

まほろば賞に決まった「破れ蓮」（飯田勇）は崩壊しつつある農村を舞台に、嫁姑の問題から老人介護の問題に移行し、さらに認知症の進行から暴力性を帯び、もはや怪物のような存在となった母親の姿が、息詰まるような濃密な

は文学の本質に通じる貴重な試みがあり、それが読者を惹きつける独特の魅力になっているのではないだろうか。こうした素晴らしい作品群の中でも、ぼくがとくに注目したのは「夢の岸」（鴨居諒）という掌編だ。ほかの作品に比べてあまりにも短く印象はうすいのだが、何気ない日常の断片を列ねただけのエッセーのような語り口に、散文詩のように清冽な、一種の名人芸としか言いようのない文体が見てとれる。そこで描かれている日常の断片は、リアルであると同時に不思議な浮遊感を帯びていて、まさにタイトルに示されたような夢幻の世界の入口のような魅力的な気配を漂わせている。

それだけではない。最終的なエンディングの部分に到って文体はさらなる輝きを放ち、そこまで列ねられた一見バラバラのように見える断片が互いに交錯し、有機的に結びついていく。そのことによってこの作品がただの随想ではなく、作者によって緻密に構築された野心的な文学作品だということが明らかになっていく。しかも作品の冒頭で示された小舟のイメージが最後に再び登場するに及んで、作品は見事な円環を成して終結する。このような秀作がさりげなく置かれている同人誌の世界の奥深さに、改めて感動を覚えずにはいられなかった。



こはま きよし
1950 沖縄県生まれ
劇団四季など様々な職を遍歴
87 作家中上健次に師事、マネージャーを務めるかたわら文学修行
88「風の河」で文学界新人賞を受賞
他の作品に「消える島」「後生橋」「光の群れ」「火の闇」などがある

どれも鮮烈な作品

小浜清志

「負け犬」瀬崎峰永。壮絶な作品である。特に手記の場面は鮮烈である。

白杖の太ったおばあさんに親切心をだして家まで送り届けてから知らない道を歩いた。公園脇にパール色のハイエースが止まっていて運転席から大きくてマッチョな男が降りてきた。スキンヘッドでヤバそうな男だったので私は車とは反対側を歩いた。しかし、男は私に近づいて来るなり、ねえごめんと話しかけてきた。なにがごめんだろうと振り向いた瞬間拳骨で頬を殴られ私は道に倒れる。男はそんな私をハイエースの後部座席まで引きずって行く。私は気が狂ったように大声をあげて助けを求めると、男は私のアゴ

を拳で殴りごめんと呟く。周りには人がいたはずなのに誰も助けには来なかった。男は車を十分ほど移動させ大音量の音楽をかけたまま後部座席に来るなり平手でなんども顔を殴り制服のスカートをめくってくる。

レイプの描写は幾度も目を背けなくなったが、ただその迫力にねじ伏せられてしまった。迫真の表現は時に戦慄さえ覚え、紡ぎだされる文字に翻弄されつづけた。いたるところにリアリティがありこれは経験者の手記かとさえ思っただ。人間が泥にまみれ地獄へと落ちていく様をこれほど完璧に描かれると文字は凶器にもなりえるのだと怯えた。最初に読み終えた時、当選作でもないのではないかと思っただ。私はこの作品を生涯忘れることはないだろう。

「しずり雪」小網春美。しずり雪という言葉がこの作品で初めて知った。「私」七尾朱里と立花修司の不思議な関係を描いた作品でとても好感を覚えた。

私は立花の経営するラクトラベルでアルバイトとして働き始める。周りは全員大卒であるが私は専門学校卒。しかし、一年のアルバイトから正社員になると私は頭角を現しつねに上位の営業成績を争うようになる。そしてついに社長である立花と対等に渡り合うようになる。プライベートでも付き合いが増えていくが一線を越えることはなかった。それは二十六歳という年の差もあり私の二度の離婚で

もあつた。二度の離婚をした直後に立花と食事をしたとき、徐々に肥満の度合いを深めていく立花に私が忠告すると、僕が病気になるって先がわからないとなつたら七尾と結婚すると立花が宣言した。結婚するという言葉があまりにも軽かったが、急に重くなっていく。互いに独身であり年の差があつたとしても男と女である。私は逃げ口上として、結婚なんかしなくたって立花さんが病気になるつたら必ず面倒はみます、立花さんの死に水は私が取つてあげますからと答えてしまった。逃げ口上ではあつたが家族のいない立花の面倒は私が見るのだと思つた。だから、結婚でなくて、養子だつたらなつてもいいと伝える。だが、立花は強い口調で養子ではだめなんだと言つたが、口調を和らげるように、七尾に死に水を取つてもらえろとは嬉しいね、

そうしたら僕が今住んでいるマンションをあげるよと告げた。そんなやり取りがあつてから間もなくして会社の経営が悪化する。二年間低空飛行を続けたのち大手の会社との合併がみえる。社員たちは喜ぶが私は会社を辞める。私は会社を辞めても定期的に立花と連絡をとり合つていたが、ある日マンションに呼び出されて病氣のことを知らされ、結婚して金沢で暮らさないと頼まれる。悩んだあげくに立花の介護をする決心を固めるが、親には言いだしにくい。しかし、金沢行きはいきさつを伝えると、あんなにお世話になつた社長の面倒を見る仕事だと割り切つてがんば

りなさいと逆に励まされてしまう。死に向かい弱っていく立花との金沢での生活を作者は丁寧に描いていく。立花の意向を受けて婚姻届けを提出するまでのいきさつも破綻なく表現される。そして、立花の前で私が全裸になつた場面は思わず快哉を叫んでいた。男と女の危うい空気をきちんと掬い取り巧みな文字でひるげてくれる作品世界に心が癒された。

「狐火」渡辺光昭。

書き出しから不思議な人物が登場する。決まった曜日と決まった時刻にひとりの男が現れる。通勤者や高校生の列が生まれ始めると、そのタイミングを計つたように毎回思いがけない場所から現れ、列の端から端まで二度行きつ戻りつして、そのなかの一人の傍らにたつ。思いもかけず男に選ばれてしまった当人は、困惑して男を無視するか並ぶ場所を変えたりする。誰に狙いを定めるか、男の根拠は不確かで気紛れにしか見えない。男はその後あらためて最後尾につく。自分の後ろに新たに人が並ぶとさつと身を翻して脇に退き、会釈して場所を譲る。やがてバスがきて行列は次から次へと車内のみ込まれていくが男は自分の番がやってきても乗ろうとはせず、駆け込みで乗車する人の進路を妨害しないように立ち、慌ただしく乗りこむ一人一人を見送る。その間も、男の口元からは切れ目なくつぶやき

声が漏れ出ている。やがてバスが走り出す後姿を、男は直立不動のまま、敬礼の姿勢を取って見送り続ける。この変わった男とともに本多暁子という伯母の存在がこの作品をより複雑なものにしていく。十五年前の、夏休みに入ってからまだ間もない昼下がりに、学生服に身を包み、学生帽を目深にかぶった人が玄関に立っていた。学生帽の庇で顔の半分はかくれていたが白い肌も鮮やかな唇も学生服には違和感があった。「たみおちゃん、ただいま」と主人公直也の父の名を呼んだ。突然背後で悲鳴があがる。母が両手で口を押えたまま棒立ちになっていた。玄関での騒動を聞きつけて妹の梨沙も母の腰にすがりつくようにして訪問者を見ている。狼狽する三人の後ろから祖母が現れ訪問者が暁子伯母だと直也がようやく納得する。暁子は波乱な人生の後精神病での入院生活を余儀なくされ、二か月前に大腸がん末期の診断を受け入院した病院が直也の近くだったため直也が緊急連絡先にされていた。一度会ったきりの暁子伯母が危篤になったとの連絡が入る。時計は午後十時を回っている。最終バスは終わっているし、酒を呑んでいるので車は運転できない。降りしきる雪で交通網は混乱しているであろう。結局二時間かけて辿り着いたが叔母はすでに息をひきとっていた。慌ただしい葬儀を終えて久しぶりに仕事に復帰すると決めると、バス停の男の煩わしさが甦ってくる。しかし、男は現れることはなかった。休みの日に

た。という妄想のような話からはじまり、次は娘の人形が消えるというエピソードにつながられる。文化祭の演劇で人形が小道具として使われることになる。娘が小さい時に買った人形であるがそれは瀬尾にも記憶があった。そして、次の日曜は一家総出で大捜索を行う。家の中のありとあらゆるところ、押し入れの奥、倉庫の中に収めているものを出してまで捜すことになった。しかし、何処にも見あたらぬ。

「静香があまり放っておくものだからきつとこの家に嫌気がさして出ていってしまったんだよ」

まるで人形に意志があるような最後の言葉が夢の岸と繋がっている。次の竹藪でも同じように夢という曖昧模糊とした概念に向かおうとする。それは家の庭に植えてある花にも現れる。「まるで花達が瀬尾のした何かに腹を立て、しめしあわせて花を咲かせずにしているように思えて仕方なかった。」

そして、花の咲かない椿の木を切ろうかと庭師と話した翌年にその椿が一遍にたくさんの花を咲かせるようになった。という友人の話に発展していく。まさしく夢の岸辺にたどりつく人間の想像は物にも植物にもあるだろう。

「破れ連」飯田 芳。

当選作になったこの作品は何といっても緻密さと勢いに

かつて男を尾行したことのある道を辿ってみると男の住んでいた家は火災にあつたらしく黒ずんだ柱があるだけだった。そして、夢のなかで男の家に火を点けたのが暁子伯母だと男が告げる。そして「キツネビが遠くに見えていても、そんな時には、キツネは見ている人間の隣にいるんだ。」という謎の言葉を残す。

男も暁子伯母も直也の妄想ともとれる。見方を変えてもそれぞれに見えるのがこの作品の奥の深さであろう。

「夢の岸」鴨居 諒

池の端に小さな船が引き揚げられている。瀬尾が散歩するときには必ず通る場所で、家から歩いて十五分ほどの場所にある。はじめはよくある風景だと思っていたが、よく考えてみたら疑問が次々と湧いてくる。そんなに大きくもない池に船を浮かべても景観がいいとは言えない。ボート乗り場にあるような二人乗りの船で魚釣りをするのも不釣り合いである。少し長めの棹さえあれば池のどこにでも釣り糸は垂らせる。そこで釣りをしている人を見たこともないし、魚がいると聞いたこともない。瀬尾はその夜家族と夕食をともしながらボートのことを考えていた。あの船は夜みんなが寝静まった頃何処かへ出掛けているに違いない。そして朝になるとまるで何事もなかったように、しらぬ顔をして全く同じ場所に戻っている。そんな想像をし

あふれている。レンコンを細々と栽培しながらバアバの年金をあてにしながら生きている私は、かつて勤めていた鉄工所にとまるとき部品を届けにきた工具店の娘と所帯を持った。子も生まれ親と同居するようになってから妻との距離がひろがっていく。バアバと妻のあいだでうろろろするしかなかった。父が死んでからバアバが豹変する。葬儀から戻ってきた夜からバアバは父の座っていた場所を占領し周りには嫁の悪口を吐き散らしていた。妻から別居を切り出されたがそれを実行するには金銭的にも余裕がなかった。ある晩からバアバの奇行が始まる。押し入れにあった古い枕を女の子の死体だと喚いているのである。その後バアバは夜の一時頃になると同じような騒ぎを起こすようになる。妻は寝不足になりパートへの出勤途中で追突事故を起こしてしまう。

それからしばらくして妻は家を出て行く。

痴呆の進んできたバアバの奇行を食い止めるため外側から鍵をかけて出掛けるようにしていたが、ある日玄関の外鍵を忘れて外出してしまった。農協の人と立ち話をしているときバアバの姿を発見する。家では前屈みで歩幅も小さく、時には壁伝いで歩くバアバがまるで鎖を解き放された犬のように、手を振って歩いている。いかにも楽しさを感じている大きな腕の振り、目標があたかも定まっかけているかのようなしつかりとした足取り。バアバを追いかけてい

くが私の息はすでにあがっていた。田のひろがる所に立った。バアバは遠い先を相変わらず歩き続けている。家での様子は仮の姿だったのだろうか。私は何度も立ち止まり深く息を吸って走り出した。しかし、バアバはあろうことか植えたばかりの田へ飛び込んだのである。逆にたじろいだのは私の方だった。まだ根もはってない苗は踏まれればすぐに浮いてしまう。急いで田から引き上げなければならぬ。バアバは容赦なく田を横切る。しかたなく私も田に入りバアバを捕獲する。二人はずぶ濡れ泥まみれになる。バアバを背負い家に戻る。私はやるせなさを抱きながら、バアバが踏みつぶした苗の事を思うと一層足取りが重くなった。

湯船に湯をはりながら、タイルの床に泥が落ちるのも構わずバアバの衣服を手荒くはぎ取っていく。そこから、私がバアバを溺死させるまでの描写が素晴らしい。遊びにも似た湯船でのやりとりが死に繋がっていくのは自然な出来事に見えた。実際に経験をしたことがあるかどうかは別としても作品から伝わってくる迫真性は読み手を惹きつけて放さなかった。一つだけ残念に思ったのは冒頭にバアバの死を持ってきたことである。

賞を取りにくい。賞を取る場合は、否応なく認めさせるだけの強烈な振り切りを示す場合だろう。負の領域を示しての優れた作品はドストエフスキーの「悪霊」やフォークナーの「サンクチュアリ」などがあり、佐木隆三の「復讐するは我にあり」もそれに近く、その徹底した「悪」の露呈には圧倒され、完璧に打ちのめされるが、そこまではなかなか到達しにくい。中途半端さが若干救いにもなり、それがまた逆に後味の悪さももたせて残るのかもしれない。

今回はおそらく評価がバラバラで、どの作品がどんな支持を受けるか、予測がつかなかった。どういう結果になるか、危うい気持ちで選考会に臨んだ。果たして蓋を開けてみると、まったくその通りになった。これほど割れた選考会は初めてだった。しかしこういう選考会があってもいい。二回前の選考会は満場一致で決まった。その逆があってもおかしくない。

瀬崎永氏の「負け犬」は、強姦された少女の手記が主旋律になっている。方法は新鮮で、突き放した冷たい叙述がそのリアリティを引き立たせていて、主治医師や看護師の態度が少女の輪郭を際立たせている。医師には医師の世界があり、看護師には看護師の世界があるという割られた存在は、真に交わることなく、事件の結末を招いていく。描写は鋭く、冷たさが光を帯びている。学校に行かなくなると、転落の道を辿って自分の右腕に「負け犬」と刺青する



いがらし つとむ
1949 山梨県生まれ
早稲田大学文学部文芸科卒
79「流瀆の島」群像新人長編小説賞
84-90カンボジアを中心に東南アジアを取材「東南アジア通信」編集長
主著「緑の手紙」（読売新聞・NTT プリンテック「インターネット文芸」最優秀賞）・「鉄の光」「ノンチャン、NONGCHAN / 聖丘寺院へ」「破壊者たち」

迫力ある問題作

五十嵐勉

第一五回を迎えたまほろば賞は、候補優秀作が五篇で普段より一つ少なかったが、問題作が集まった。題材が衝撃的で、負の領域に引き込まれる迫力はこれまでで最も大きかった。特に「負け犬」、「狐火」、「破れ蓮」は、それぞれ犯罪の領域にまで深く踏み込むことによって日常を暴いていて、その切開力は鋭く、否応なく内臓を見せつけられる迫真性は、スリリングで、文学の一つの領域をあらためて開示してくれるものだった。ただ、迫力は強いものの、読み終わって読後感がいいかと言うと、何となく後味の悪いものが残る。それがやや作品を親しくさせないもどかしさをも内包していた。またこういう領域の作品は、一般的に

シーンはこの筆者でなければ書けない痛烈なものがある。またそれぞれの部分や領域を丹念に調べてその上で書いている生々しい筆致がある。本来このリアリティだけでも賞に値すると思われるが、今回は鳥への個人の趣味に埋没する医師の顔や看護師の関わりの遠さが間接的に少女を自死に追い込んでいる冷淡さが逆に足を引っ張った。父親へのコンプレックスが示され、「負け犬」という視線で見下す父親が会いに来ると言うことを聞いて自死するその理由の、深い位置での事情が示されていないところにやや曖昧な不足感が残る。これらが真に一つの方向を向いて焦点を示されれば、より完成度は高まっただろう。力量はあるので、また気を取り直して意欲作に挑戦してほしい。

「まほろば賞」となった飯田芳氏の「破れ蓮」は、現代版「母殺し」の小説である。筆者の確かな筆致によって、介護を受ける認知症の母親を殺さざるをえなくなる過程がしっかりと描かれている。その流れに淀みはない。妻の離反、彷徨、便の処理、叫びと、殺しへ追い詰められていく悲劇性は確かに取斂している。これはまた、この過程で不思議な普遍的共感を呼び寄せてくる。それは現在の日本において、同じような立場に立たされ、殺意と忍耐と愛情の間を揺れ動いている人たちがたくさんいることの共鳴である。それは大きなものとして鳴り響きつつ、もう一つ躊躇いのうちに別な眼差しをも投げかけてくる。自分の母親を「バアバ」と簡

単に呼んでしまうその命の関連の希薄さ、母親の頭を湯船に押さえ込む自分の手の力の虐待性——それらはある一線を超えてしまう罪悪の欠如を伴って、親子の根本を腐食させる。主人公は最後に死んだ母親に誘われるように蓮池の泥沼に吸い込まれるのだが、最も重要な親子の間の尊厳に、迫り切っていない恨みが残る。より広がりを感じさせる側面と、何か重要なものが置き去りにされている不足感とが、背反しているところにこの作品の特徴がある。

特別賞となった渡辺光昭氏の「狐火」は、バス停で待つ人に順番を譲っていく奇行の持ち主の人物像が妙に生々しく、不思議な存在感を持っていて、つい引き込まれて読んでも魅惑があり、学生服を来て家に勤め先から逃れてくる狂気の端緒も鮮烈に残る。風変わりな狂気の系譜がここには確かに流れており、それが生きる過程でつねに足元に覗いているその危うさも、主人公を通して迫ってくる。最後は狐火の炎の舞に呑み込まれていくのだが、最後まで狂気に逃れていった伯母と火事でわからなくなった奇行の男の像が焼き付いて離れない強い残像を持った作品である。

後味の良さは鴨居諒氏の「夢の岸」が一番で、夢と現実のあわいが見事に描かれていて、生命というつねに揺れ動いている表象の浮薄性と流動性が浮かび上がってくる。竹藪も台風も草木も、みな命の表象としてうねり動いてい



なかみ のり
1971 東京生まれ
ハワイ大学美術学部卒業
99「イラワジの赤い花 ミャンマ
ーの旅」(集英社)を上梓
同年「彼女のプレнка」(集英社)
ですばる文学賞受賞
「悪霊」(毎日新聞社)「いつか物語に
なるまで」(品文社)「夢の船旅—父中
上健次と熊野—」(河出書房新社)「ア
ジア熱」(大田出版)「シャーマンが歌
う夜」(水の宴)(集英社)「海の宮」
(新潮社)「熊野物語」(平凡社)「天
狗の回路」(筑摩書房)など著作多数

現実から逃げてみた先

中上紀

今年もまほろば賞の選考に参加させていただいた。去年に引き続きコロナ禍での開催であったから、人恋しさがひととき募り、会場で選考委員の三田誠広、小浜清志、五十嵐勉各氏にお目にかかるのが楽しみでならなかった。この日に語り合った小説五作品も、例年以上にレベルが高く、素晴らしいの一言だった。疫病という怪物は、もはや日常生活に当たり前のように横たわるようになったが、文学だけは脅かすことはない。まほろば賞と選考会だった。

さて、そうは言いつつも、選考そのものはかなり難航した。なぜなら、五作品それぞれが、まったく異なる切実さ

その万象の命の様相が感じられるところに、この作品の妙味がある。夢のつながりは生命のつながりとして巡り動いている鼓動が聞こえてくる。この作品は特に三田誠広氏が高く評価し、「三田誠広賞」を授与された。三田氏がこれまで支持したのは、初めてである。祝意を表したい。

小網春美氏の「しずり雪」は元会社の上司の癌末期の看取りをする女性のストーリーで、随所に見られる確かな叙述が経験によって磨かれた光を放っている点に魅力があった。男女に存在感がある。年齢差や財産の引き継ぎにややもたついた筆跡も感じられたが、「しずり雪」という魅力ある言葉を選ぶ感覚や、旅行会社の世界を的確に描く実社会の重みを備えている点でも、評価が高かった。特に中上紀氏と小浜清志氏がこの作品を買って、河林賞に推挙した。

今回から、「まほろば賞」は、徳島県三好市の「富士正晴同人雑誌賞」を引き継ぐ形で始まった全国同人雑誌賞と並ぶ大きな賞となり、いっそう重みが増したように思う。実質的に「まほろば賞」のこれらの作品は昨今の芥川賞作品よりも優れている。インパクトもある。今夏の芥川賞二作品も読んでみたが、ぬるくてボケている。同人雑誌に拠って創作に励む作家は、そんな作品を踏み倒し、「自分が日本文学の流れを変える」くらいの意欲を持って、新たな力作を発表してほしい。

のある、重々しいテーマを抱えているのである。私自身、最後の最後まで悩み、推すべき作品を決められないまま、選考会に臨むしかなかったくらいだ。かくしてお聞かせいただいた各先生方のお話は、すべて納得が行き、かつ勉強になるものばかりであったが、同時に何れの作品にも受賞の可能性があると、いうことを逆にはつきりと突き付けられ、結果さらに決断を迷うことになった。投票は一回目では決まらず、二回目ようやく決定という経緯であった。

以下、私の感じたことを順不同に書かせていただく。

小網春美氏の「しずり雪」は、主人公である七尾という女性の繊細な心情に心を重ねながら読んだ。七尾が最後まで看取る決心をした年の離れた男性立花は、会社の社長だけれども、同時に親のようでもあり、恋人のようでもある友人だ。特定の呼び方で呼ぶことが出来ない、この微妙な関係性のあわいに引き込まれた。人間関係は、年齢を重ねるにつれて、はつきりと名前を付けることの出来ないあまいなものが増えていく。七尾自身も、二度の結婚に失敗し、子どもも二人いるいい年なのである。立花との生活はほとんど介護である。やがて男は結婚を求め、七尾は受け入れたら嘘になるが、同時に、あえて相続を了承することで立花を後ろめたい気持ちにさせないという七尾の優しさが胸を打つ。金沢の風景、そしてはじめて目にした雪の形の一つ「し



第15回まほろば賞選考会風景 2021.7.25 大田区民プラザ会議室で



作家集団「塊」／文芸思潮

河林満賞の移設とJUNO

河林満文学賞は、二〇〇八年一月十九日脳出血で急逝した作家・河林満を偲び、その文学への情熱と創作にかける志を遺す意を込めて、御遺族の寄付を基に、二〇〇八年十二月十日に創設されたものです。故河林満の文学への熱情と響き合う、優れた小説作品・創作活動への顕彰とさせていただきます。

贈賞作品はこれまで銀華文学賞に応募される小説作品を対象にしてきましたが、銀華文学賞の一時中断以後まほろば賞のなかに移されることになりました。同人雑誌の優秀な作品に贈賞され、受賞者には賞状、記念品、賞金十万円が授与されます。(二〇二二年改訂) この賞によって、たゆまず小説創作に情熱を燃やす方々に光を当てることができましたら幸いです。

ずり雪」の描写に引き込まれた。

瀬崎峰永氏の「負け犬」では、まず病院のスタッフや患者をいろいろな鳥に例えるのが好きな個性の強い医者に目を奪われる。入院している少女が記した手記に書かれた生々しい立ちから性暴力を受け自殺未遂に至るまでの経緯は生々しい。幼い妹を失ったという過去や、父親と一緒に入浴した時にされた行為など、気になる部分を孕んだ父親との関係性が、綾乃の自殺で一方的な謎に書き換えられて読者に突き付けられる。途切れてしまったのは、自らの手で自由を手に入れた命が、どこかへ飛んで行ってしまったからなのだろうか。あるいは、医者言葉のように彼女が鳥のようなのだとしたら、これは鳥葬か。

「狐火」は渡辺光昭氏の作品だ。バス停で出会った奇妙な男を追いかけていくことでふっと日常から離れた別の次元のような世界に入り込むという経緯が面白い。その男が醸し出す非日常性から、主人公は異質な存在であった自らの叔母を思い出す。出てくる人物たちみんなが狂気を孕んでいるようなエンディングには圧倒された。もちろん、一番は主人公であろう。男の家が火事で消滅し、住人が行方不明と聞いて、直也は過去の火事とそれを重ね合わせるのだが、直也が忘れたと思うていたことを、幻想の中の叔母に告げられ、破滅していく経緯には圧倒される。

鴨居諒氏の「夢の岸」は、語り手である瀬尾の幻想が日

常をじわりじわりと浸食していく形で進んでいく。大きな事件が起こるといっているのではないが、池に浮かんだボートであったり、庭で育てている芍薬であったり、紛失してしまった娘の人形であったりといったモチーフが、コラーージュのような独特の世界を作り出している短編だ。ここにも微かなズレのようなものを感じた。厳密に言えば、夢と日常の境界を感じた。その夢の中で主人公は気付いたら「みんなが寝静まったところ何処かへ出かけ」て、夜には「その場所に戻っている」というボートに乗る。そしてたくさんの記憶の断片が現実の声のように主人公の前に立ち現れてくる。

飯田芳氏の「破れ蓮」の主人公「私」は、物語の最後で蓮田に沈めた母親の胎内に還っていく。途中から、読み手が先を想像できてしまう展開ではあったが、しかしながら、補って余りあるほどの筆の力と、目をそむけたくなくなるほどの生への執着があった。介護と一言で言い表すにはあまりにも重い問題の中で、夫の妻は苦しみぬいた末に逃げ出した。残された認知症の母親を前に追い詰められていく「私」は、他人ごとではない。ラストシーンで、蓮の田から抜けることが出来ないのは、主人公の罪悪感の回収だろうか。レンコンの収穫の様子を女体の愛撫に例えたのが斬新で、目がくぎ付けになった。

現実から逃げ出した先を覗き見るように読み終えた五作だった。